

# 横浜 I R 景観デザインノート

～横浜市の考える創造的な景観形成～



## はじめに ～『横浜 I R』の方向性と景観デザインノートの位置づけ～

安政6年（1859）の開港を機に、海外諸国との交易の中心となった横浜は、世界中から集まる人・モノ・情報・文化であふれ、文明開化の名の元に、近代日本の成長をけん引する国際的な港湾都市として、目覚ましい発展を遂げてきました。その後の震災や戦災、東京一極集中の人口急増など横浜の5重苦と言われた困難な状況においても、個性ある自立都市を目指す熱意と気概を持ち、六大事業に着手し、みなとみらい21地区をはじめとする事業を着実に進め、人口375万人、最大の基礎自治体として、日本有数の経済都市に成長してきました。

今後、横浜においても人口減少、超高齢社会等、様々な社会経済情勢の変化が見込まれます。そうした中でも、市民が生き生きと暮らし、魅力と活力あふれる都市であり続けるため、横浜は今ある「横浜らしさ」に誇りを持ちながら、新しい文化を迎え入れ、将来を見据えた新たな「横浜らしさ」の創造に向けてチャレンジする必要があります。

現在、横浜は開港からの異国情緒の残る山下公園、元町、中華街や、若者に人気のみなとみらい21地区など、日本有数の観光地として多くの人で賑わっています。また、パシフィコ横浜では、多くの国際会議などが開かれ、「グローバルMICE都市」としての地位を築いてきました。

### 【基本コンセプト】

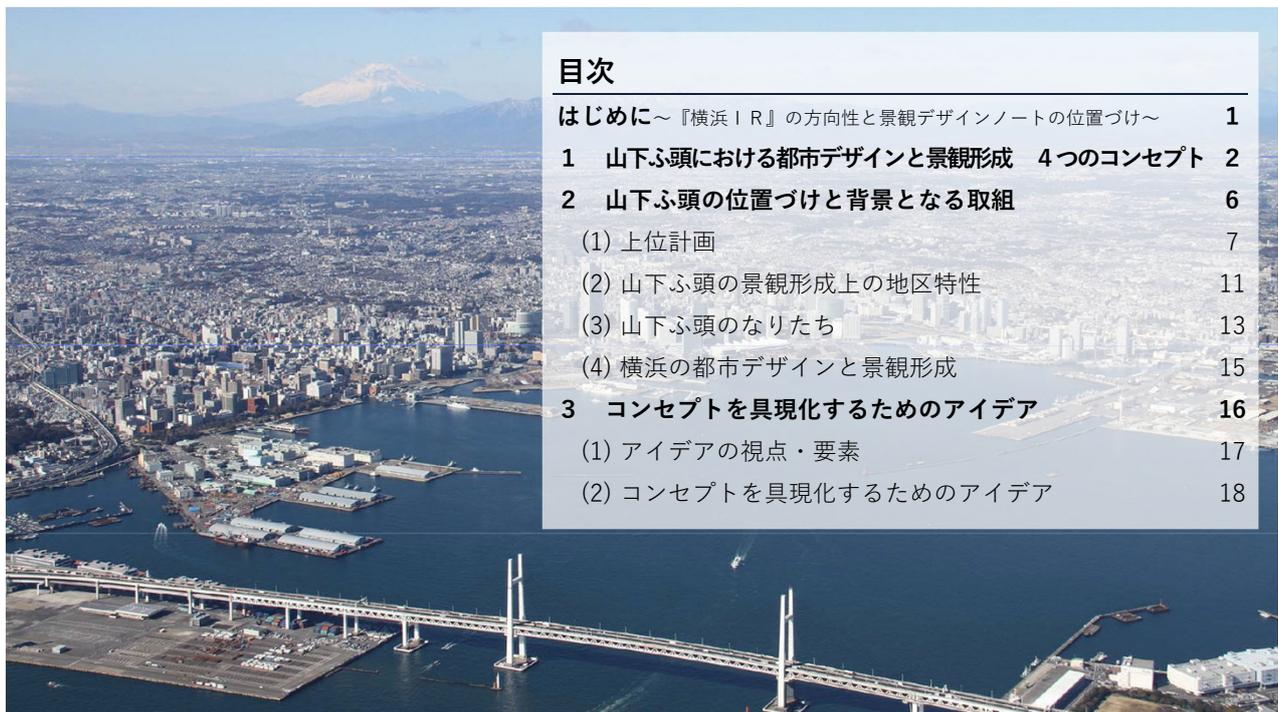
『横浜IR』では、世界水準のMICE施設、ホテル、エンターテインメントや最先端のテクノロジー(技術)を駆使した未来の街を、**これまで築き上げてきた都心臨海部の街の魅力や資源と一体的に整備し、融合していくことで、相乗効果を最大限に発揮**するとともに、新たな魅力・資源をハイブリッド（混成）に創造し、横浜の観光・経済にイノベーション(革新)をもたらしていきます。そして、横浜都心臨海部がこれからも、横浜市民の憩いの場であるとともに、世界各国の人々が、日本に行ってみよう！日本に行くなら横浜に行ってみよう！そう思ってもらえる**“横浜イノベーションIR”**を目指していきます。

### 【景観デザインノートの位置づけ】

この景観デザインノートは、『横浜IRの方向性』における「都市デザイン・景観形成」について、上位計画や地区特性、歴史、これまでのまちづくりの取組を十分に踏まえつつ、事業者とともに**21世紀を象徴するような新しい横浜の都市デザイン・景観づくりに挑戦**していくためのものになります。

## 《山下ふ頭の目指す姿》

横浜やインナーハーバーの地区特性や歴史、これまでのまちづくりの取組を十分に踏まえつつ、**山下ふ頭では、21世紀を象徴するような、新しい横浜の都市デザイン・景観づくりに挑戦**します。



山下ふ頭における  
都市デザインと景観形成  
4つのコンセプト

～『横浜IR（統合型リゾート）の方向性』より～

1

# 1 山下ふ頭における都市デザインと景観形成 4つのコンセプト

～『横浜IR（統合型リゾート）の方向性』より～

## 都市デザイン・景観形成に係る上位計画

### 横浜市都心臨海部再生マスタープラン

▶▶▶ P7

#### ◆ 3つの基本戦略

- ① 次の時代の横浜の活力をけん引するビジネス・産業づくり
- ② 豊かな想像力・市民力が息づく横浜スタイルの暮らしづくり
- ③ 個性豊かなまちの魅力をつなぎ港と共に発展する都心づくり

#### ◆ 5つの施策

- ① 世界中の人々を惹き付ける空間・拠点の形成（都市デザインによる創造性豊かな空間づくり）
- ② まちを楽しむ多彩な交通の充実
- ③ 世界を先導するスマートな環境の創出
- ④ 災害に強い都心臨海部の実現
- ⑤ 都市活動の担い手が活躍する仕組み・体制の充実

### 横浜市山下ふ頭開発基本計画

▶▶▶ P9

- ◆ 目指す都市像 ハーバーリゾートの形成  
～世界が目出し、横浜が目的地となる都心臨海部にふさわしい新たな魅力創出～

#### ◆ 3つの視点と8つの基本計画方針

視点 1	観光・MICEを中心とした魅力的な賑わいの創出	[方針1] 国内外から多くの人を呼び込む賑わいの創出 [方針2] 地区内外の移動を支える交通ネットワークの形成 [方針3] 快適で回遊性のある歩行者動線の確保
視点 2	親水性豊かなウォーターフロントの創出	[方針4] 水と緑を身近に感じる空間づくり [方針5] 港町の魅力を高める景観形成
視点 3	環境に配慮したスマートエリアの創出	[方針6] 環境に配慮したまちづくり [方針7] 高い防災・安全性をもつまちづくり [方針8] わかりやすく利便性の高い魅力あるまちづくり

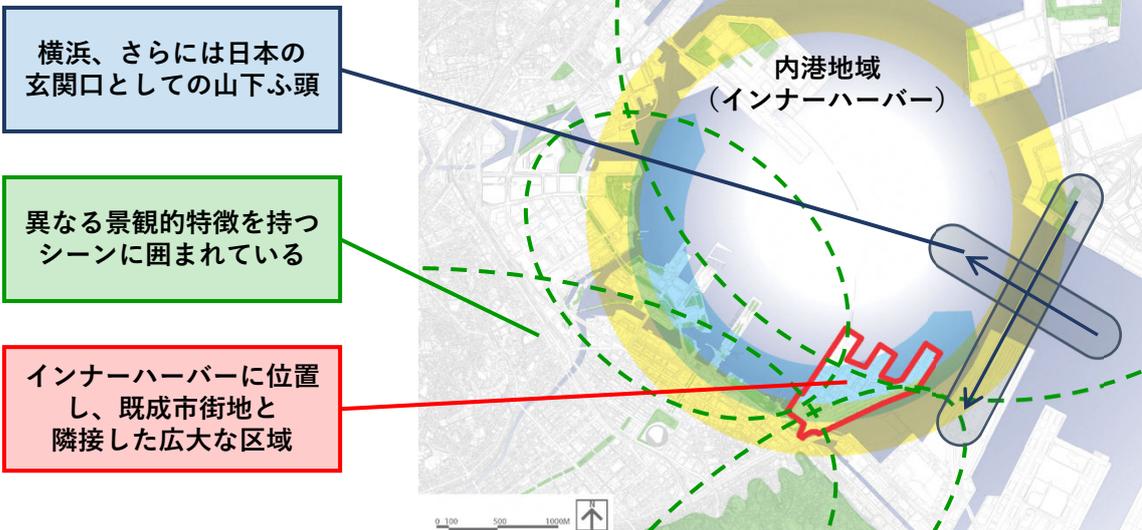
### 美しい港の景観形成構想

▶▶▶ P10

- 内港地域の景観形成 4つの視点
- ① リング状の港の構造を生かした景観の形成
  - ② 誰もが美しさを感じる景観の形成
  - ③ 横浜の港らしい特徴的な景観の形成
  - ④ 人々の生活・活動による賑わい景観の形成

## 山下ふ頭の地区特性

▶▶▶ P11



横浜やインナーハーバーの地区特性、歴史、これまでのまちづくりの取組を十分踏まえつつ、  
**山下ふ頭では、21世紀を象徴するような、  
新しい横浜の都市デザイン・景観づくりに挑戦します。**

#### ■ 4つのコンセプト

山下ふ頭は、横浜の都心臨海部に残された唯一大規模開発の可能な土地です。そのことを最大限生かし、世界最高水準のIRとして、幅広い客層が楽しめる非日常的で印象的な空間を有し、また、これまで横浜の都心臨海部で築き上げた、市民に親しまれるウォーターフロントエリアの一部にもなる、「横浜イノベーションIR」を形成します。

横浜のそれぞれの時代を代表する景観に敬意を払いつつ、山下ふ頭を核としてインナーハーバー全体が都市としての魅力をさらに高める、21世紀を象徴するような新しい横浜の都市デザイン・景観づくりに挑戦します。その実現のためのコンセプトを掲げます。

### 1. 長く愛され、何度も訪れたい都市・横浜をつくる

山下ふ頭に多くの人が訪れ、何度も訪れたい都市を実現します。

山下ふ頭の建造物や空間、それらにより形成される景観は、いたずらに刺激的なものではなく、**機能性と普遍的な美しさを兼ね備え、長期的にその価値を持ち続けるもの**を目指します。

また、山下ふ頭の開発は短期間に一体的に行われますが、一過性のものではなく、**常に新たな価値を生み出す取組を継続し、長期的に価値を持続・向上しつづけるもの**としていきます。

### 2. インナーハーバーの一員として、横浜の都市づくりの新たな1ページをつくる

インナーハーバーでは、関内地区や山手地区、みなとみらい21地区など、各地区、各時代の景観的特徴を維持・創出してきました。これらの地区が、景観的な個性の発揮と調和のバランスをとりながらリング状につながっているのが、インナーハーバーの大きな特徴となっています。

山下ふ頭に生み出される景観は、**インナーハーバーに加わる新たな都市づくりの1ページとして、地域全体の景観と調和しつつ、山下ふ頭とこれまでの街並みの個性が対比しながらひきたてあうこと**で同時に、都心臨海部の魅力を形成します。

### 3. 山下ふ頭だからできる景観体験の創造

山下ふ頭は、一体開発により広大な土地を一貫性のあるデザインとできることに大きな特徴と可能性があり、エリアを回遊しながら体験する景観は、**多様な物語性**があるものでなくてはなりません。

また、横浜の景観を楽しむ**新たな視点場、多様な水域を活用したアクティビティ**など多彩な体験の場の創出が可能です。ここに生まれる施設によって提供される横浜の新しい見え方、切り取り方は既存の横浜の景観的価値を更に向上するだけでなく、山下ふ頭自体にこれまでにない**体験**をもたらします。

### 4. 世界に“横浜を魅せる”これからの都市デザイン

都市・建築のデザインは、機能や人々の活動と切り離して考えることはできません。

横浜市では、SDGs未来都市、観光・MICE都市、文化芸術創造都市、イノベーション都市・横浜、ガーデンシティ横浜といった、未来のための政策やプロジェクトを進め、また、様々な主体により様々な活動を行っています。山下ふ頭ではこれからの横浜を代表する景観として、これらの**施策・活動と方向性を共にして、それを象徴的に体現するもの**であることが求められます。

象徴的な“魅せる”環境配慮や、横浜に集積する創造性の発露など、横浜のショーケースとしての独自性ある景観づくりや市民生活を豊かにするための、これまでに無い新たなウォーターフロントでの体験を創造すること等が更に進化した「横浜らしさ」につながります。



山下ふ頭の位置づけと  
背景となる取組

2

## 2 山下ふ頭の位置づけと背景となる取組

### (1) 上位計画

#### 横浜市都心臨海部再生マスタープラン

安政6年（1859）の開港以来、都心臨海部は横浜の中心部として発展してきました。昭和40年（1965年）には、横浜の骨格を築く「横浜の都市づくり将来計画の構想（六大事業\*）」を発表し、都心部強化事業として、みなとみらい21地区の造成に着手し、現在の都心臨海部を形成してきました。

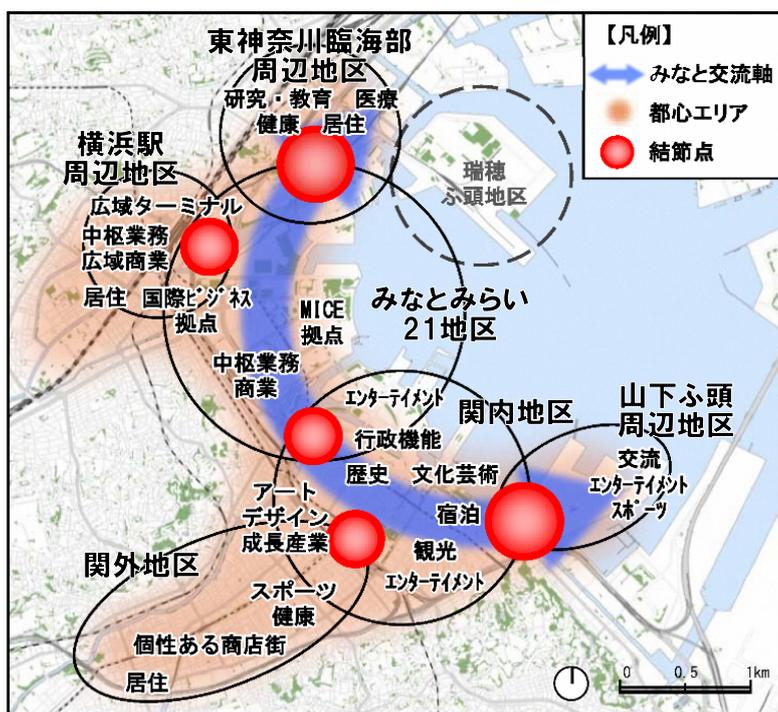
「横浜の都市づくり将来計画の構想」発表より約50年が経過し、人口減少・超高齢社会の到来による都市の活力低下、人・企業がより優れた活動・生活場所を「選ぶ」時代の到来、市民の価値観やライフスタイルの更なる多様化といった社会状況の変化が想定され、横浜のまちづくりとしての対応が求められています。

また、平成22年（2010）には、横浜市インナーハーバー検討委員会から、都心臨海部・インナーハーバーにおけるまちづくりの方向性が提言されました。

将来の社会状況の変化に対応し、将来にわたり輝き続け、魅力にあふれた“世界都市”の顔としての都心臨海部を形成するため、横浜駅周辺地区、みなとみらい21地区、関内・関外地区、山下ふ頭周辺地区、東神奈川臨海部周辺地区の5地区を対象とした「横浜市都心臨海部再生マスタープラン」を平成27年（2015）2月に策定しました。

「世界が注目し、横浜が目的地となる新しい都心」を将来像として掲げ、この実現に向け、「3つの基本戦略」と、それに基づく「5つの施策」に取り組むこととしています。

※ 六大事業：都心部強化事業、金沢地先埋立事業、港北ニュータウン建設事業、高速鉄道（地下鉄）建設事業、高速道路網建設事業、横浜港ベイブリッジ建設事業の6事業



【都心臨海部 位置図】

#### 東神奈川臨海部周辺地区



神奈川台場の遺構や、横浜市中央卸売市場が立地しており、現在は、駅周辺の再開発や面的整備の検討が進められています。

#### 横浜駅周辺地区



日本有数のターミナル駅である横浜駅を中心とする地区であり、国際都市の玄関口にふさわしいまちづくりを進めています。

#### みなとみらい21地区



横浜の自立性の強化等を目的に整備された新しい街であり、業務・商業機能、MICE拠点等が立地し、多くの人々が訪れています。

#### 関内・関外地区



開港の歴史が残る地区ですが、近年、業務・商業機能が相対的に低下しており、課題解決に向けたまちづくりが進められています。

## 世界から人々を惹きつける街の資源

### 港町横浜の 歴史・文化



街中には当時の面影を色濃く残す歴史的建造物や土木産業遺構が多く残り、まちづくりの中で保存・活用されています。また、異国情緒あふれる街並みや飲食店があり、開港の地ならではの国際的な雰囲気が感じられます。

### 都市空間



水際線を開放し、公園や緑地、パブリックスペース等の整備を積極的に行っています。これまで、地域の魅力と個性を生かした都市デザインの取組が展開され、美しさや楽しさが感じられる環境豊かな都市空間が形成されています。

### 都心機能



国際的な企業が立地する業務拠点や広域的な商業拠点、大規模コンベンション施設など横浜経済をけん引する都心機能が集積しています。また、都市型住宅やスポーツ施設、個性豊かな界限など都市に必要な機能が揃っています。

### 賑わい・市民活動

まちに誇りや愛着をもち、地域が主体的にまちづくりに取り組む風土が培われています。魅力的で賑わいのある商店街や、年間を通じて様々なイベントが開催される、活気あふれる街がつけられています。



## 横浜市山下ふ頭開発基本計画

都心臨海部を、今後も横浜の成長をけん引し、世界都市・横浜の顔として輝き続けるエリアとするため、平成27年（2015）9月に策定しました。都心臨海部及び横浜港における役割・機能分担を前提に、山下ふ頭の持つ大規模な開発空間や静穏な水域などの立地特性を生かし、観光・MICE機能を中心とした、これまでの横浜にはなかった、新たな賑わい拠点となる「ハーバーリゾートの形成」を目指し、3つの視点と、それに基づく8つの基本方針を定めています。

### 目指す都市像：ハーバーリゾートの形成

～世界が注目し、横浜が目的地となる都心臨海部にふさわしい新たな魅力創出～

#### 3つの視点と8つの基本方針

<b>【視点1】</b> 観光・MICEを中心とした魅力的な賑わいの創出	<b>【方針1】</b> 国内外から多くの人を呼び込む賑わいの創出 <b>【方針2】</b> 地区内外の移動を支える交通ネットワークの形成 <b>【方針3】</b> 快適で回遊性のある歩行者動線の確保
<b>【視点2】</b> 親水性豊かなウォーターフロントの創出	<b>【方針4】</b> 水と緑を身近に感じる空間づくり <b>【方針5】</b> 港町の魅力を高める景観形成
<b>【視点3】</b> 環境に配慮したスマートエリアの創出	<b>【方針6】</b> 環境に配慮したまちづくり <b>【方針7】</b> 高い防災・安全性をもつまちづくり <b>【方針8】</b> わかりやすく利便性の高い魅力あるまちづくり

#### 5つの視点場

山下ふ頭周辺には、様々な建築物や構造物、緑地や港の風景を望む眺望点があります。

特に、山下公園や大さん橋、横浜ベイブリッジなどの各視点場から山下ふ頭への眺望は、今後重要な景観要素となります。

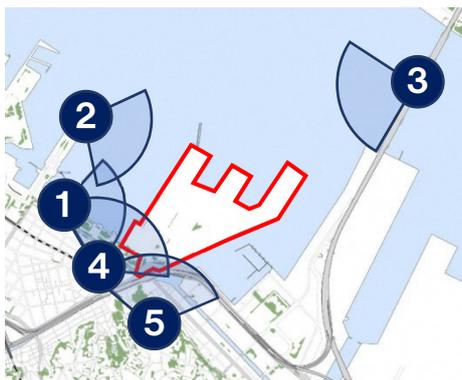
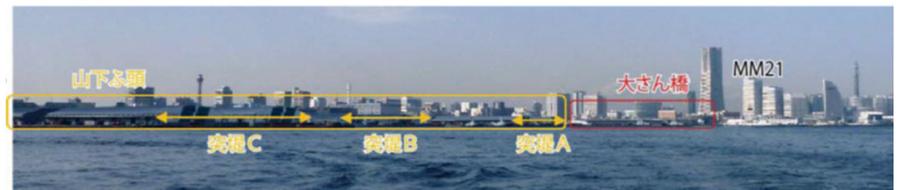
##### 視点場① 山下公園



##### 視点場② 大さん橋



##### 視点場③ 横浜ベイブリッジ（海上）



##### 視点場④ マリンタワー （俯瞰眺望）



##### 視点場⑤ 港の見える丘公園 （俯瞰眺望）



## 美しい港の景観形成構想

本構想は、「美しい港」をテーマに、横浜市が内港地域の景観形成を行っていくうえでの目標像や方針をとりまとめたものです。今後、新たに土地利用の転換などが行われる際の景観面からの配慮や、現在の取組効果や課題の検証などを行う際に、「美港」を形成するための基本的なツールとして活用していきます。

### 目標像：世界に誇る「美港」横浜

#### 内港地域の景観形成4つの視点

- ① リング状の港の構造を生かした景観の形成
- ② 誰もが美しさを感じる景観の形成
- ③ 横浜の港らしい特徴的な景観の形成
- ④ 人々の生活・活動による賑わい景観の形成



### コラム01 山手地区のなりたちと取組

横浜の山手地区は、洋館が建ち並ぶ歴史ある地区、また閑静な住宅街として、一定の観光客の受入れや、山の手からの眺望確保といった課題に丁寧に対応することで、風致を保ってきました。そのため、山手に隣接する山下ふ頭の開発も、山手の閑静な雰囲気に配慮しつつ、港の見える丘公園から見た時にも美しい景色となる開発であることが必要です。

#### 【山手地区のなりたち】

安政6年（1859）の開港以降、外国人居留地として国際色豊かな街並みが形成されましたが、大正12年（1923）の関東大震災により大きな被害を受け、現存する西洋館のほとんどはそれ以降のものとなります。また、明治以降、幼稚園から大学まで多くの教育機関が立地し、文教地区としての側面も持ち合わせています。第2次世界大戦による被害は比較的小さく済みましたが、昭和40年代後半の接収解除後のマンション建設ブームを受け、昭和47年（1972）に山手町をはじめとして近隣の元町、石川町、新山下などを含まれる地区を対象に要綱を策定し、景観保全を図ってきました。



#### 【山手地区のまちづくりの取組】

要綱の運用と合わせ、街づくり協議指針、地区計画等の導入や、地元主体のよりきめ細かいまちづくり協定も定め、行政と地元が連携してまちづくりを行っています。さらに、平成16年（2004）の景観法制定を受け、これまでの協議型のまちづくりを継承し今後もより良い景観形成を図るため、「景観計画」、「都市景観協議地区」、「山手地区都市景観形成ガイドライン(以下「ガイドライン」)」を定め、山手地区の街並みをさらに魅力的なものとし、国際色豊かな特色を発信するまちづくりを行っています。これらの取組により、緑豊かで閑静な異国情緒あふれる住宅・文教地区として多くの人々に親しまれています。

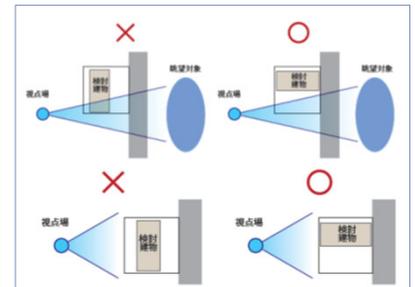


図1 視点場からの眺望に配慮した工夫

#### 【山手地区の眺望】

眺望景観を地区の重要な景観資源として保全し、魅力ある景観形成を図るため、景観計画及び都市景観協議地区において、視点場を定め、ガイドラインに、視点場から眺望対象への見通しを阻害しないための工夫や配慮事項（図1）をまとめています。また、景観計画では、港の見える丘公園やイタリア山庭園などの視点場からの眺望を阻害しないように、建築物の最高高さも定めています。（図2）

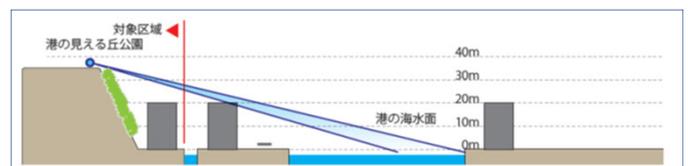


図2 港の見える丘公園から新山下地区方向の眺望の断面の例



視点場からの眺望例（港の見える丘公園から新山下地区方向の眺望）

## 2 山下ふ頭の位置づけと背景となる取組

### (2) 山下ふ頭の景観形成上の地区特性

豊かな水・緑と歴史的建造物や先進的なまちづくりが織りなす景観は、横浜の特徴かつ最大の魅力であり、「横浜らしさ」の重要な要素となっています。とりわけ、都心臨海部と横浜ベイブリッジに囲まれた内港地域（インナーハーバー）は「港町ヨコハマ」の象徴であり、原点であるといえます。

そこでまず、山下ふ頭の地理的な特徴や景観形成上の位置付けを整理します。

#### ■ インナーハーバーに位置し、既成市街地と隣接した広大な区域

- ・ 山下ふ頭は、横浜ベイブリッジより内側のインナーハーバーに位置し、東神奈川臨海部周辺地区、横浜駅周辺地区、みなとみらい21地区及び関内・関外地区とともに、都心臨海部を形成しています。
- ・ 山下ふ頭は、既成市街地と隣接した位置に約47haという広大な土地を有する都心臨海部の拠点の一つであり、横浜市民にとって貴重な場所です。これまで築き上げてきた街並みや美しい港の風景を活かした一体的な景観を創り上げるとともに、地続きで接する横浜を代表する観光地である山下公園、中華街、港の見える丘公園などと一体となった豊かな緑地空間の形成、水際線の連続した緑地・プロムナードの確保や水域利用を行うことで、既存の都心臨海部の各機能が有機的に融合し、魅力的なエリアを形成することができます。



## ■横浜、さらには日本の玄関口としての山下ふ頭

- ・山下ふ頭はインナーハーバーの入口に位置し、横浜ベイブリッジを走る車や横浜ベイブリッジをくぐりながら入港する客船から見える都心臨海部の景観上、重要な位置にあります。また、山下ふ頭の基部は、関内・関外地区との結節点であり、都心臨海部における回遊性向上につながる重要な位置となっています。
- ・最寄りの横浜高速鉄道「元町・中華街駅」まで徒歩約5分、首都高速道路にも近く、羽田空港など各方面から高いアクセス性を有しています。市内はもとより、日本各地への送客機能を整備することで、横浜だけでなく、日本の玄関口としての機能を担うことができます。
- ・既存の岸壁を活用し、新たな水上交通発着拠点の整備や、河川を含めた新たなアクセスルートを形成することで、観光資源としても魅力的な水上交通ネットワークの強化・拡充を図ることができます。

## ■異なる景観的特徴を持つシーンに囲まれている

- ・山下公園からみなとみらい21地区に続く景観、横浜ベイブリッジや海の景観、山手地区、関内や中華街などの既成市街地といった、異なる景観的特徴のある地区に囲まれています。
- ・各地区に点在する視点場からの山下ふ頭への眺望は、今後重要な景観要素となります。
- ・山下ふ頭は半島状に海に突出し、3方性格の異なる海に囲まれており、この特徴を生かした親水空間やプロムナード等の歩行者空間、様々なアクティビティ、新たな視点場等を設けることで、魅力的な空間が形成されます。



## 2 山下ふ頭の位置づけと背景となる取組

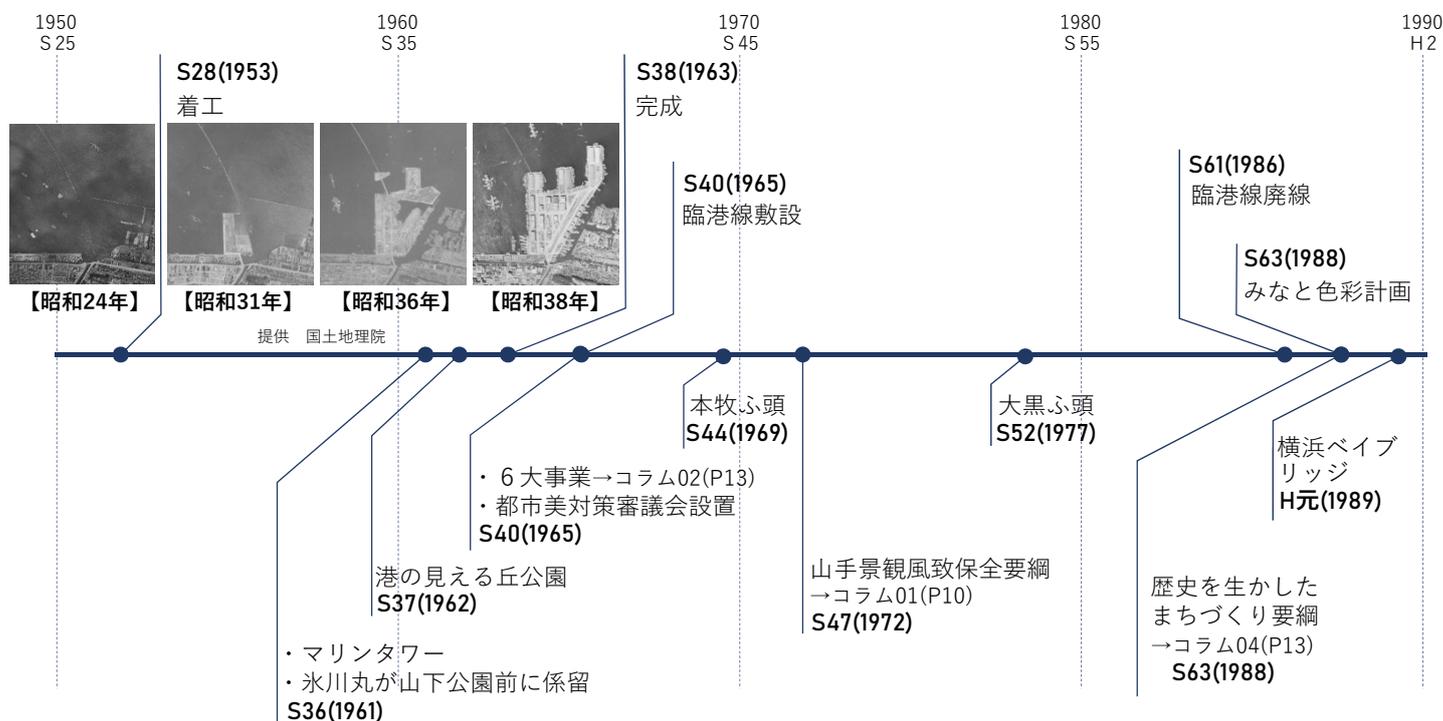
### (3) 山下ふ頭のなりたち

山下ふ頭は、横浜港の機能強化のため昭和28年（1953）から埋立を開始し、段階的に拡張しながら、昭和38年（1963）に基本施設が完成、現在の突堤3本・10バースの姿となりました。昭和40年（1965）には臨港線の敷設とともに山下埠頭駅が置かれるなど、昭和30～40年代の高度経済成長期から横浜港を支える主力ふ頭として長らくその役割を果たしてきました。

完成から50年以上経過し、施設の老朽化やコンテナ化などの物流環境の変化に伴い、その果たすべき役割を見直す時期に来ていたことから、「横浜市中期4か年計画2014～2017」や「横浜市都心臨海部再生マスタープラン」及び「横浜港港湾計画の改訂」を踏まえ、平成27年（2015）に「ハーバーリゾートの形成」を目指す「横浜市山下ふ頭開発基本計画」を策定し、再開発の方向性を決めました。また、既存の物流機能については、移転を契機として倉庫等の高機能化を促進し、「ミナトの質的転換」を図っています。



昭和38年頃の山下ふ頭の様子



#### コラム02 6大事業

##### ～前向きの都市づくり～

昭和40年（1965）、横浜市は戦災とその後の接収による復興の遅れ、高度経済成長期の乱開発などによる「五大戦争」と称された都市問題を解決し、横浜の都市構造を長期的に変革する戦略的事業として「都心部強化事業」「金沢地先埋立事業」「港北ニュータウン建設事業」「高速鉄道建設事業」「高速道路網建設計画」「横浜港ベイブリッジ建設事業」の6つのプロジェクトを発表し、自立性と独自性の高い都市を目指しました。これがいわゆる6大事業です。6つのプロジェクトは『それぞれ互いに関連をもち、補い合い、刺激しあいながら横浜市の将来の骨格となる』ことを目標としています。

※五大戦争：ごみ問題、道路交通の麻痺、環境破壊、水資源、公共用地の不足

#### コラム03 創造的協議

横浜市の景観は、長く都市デザインの手法の一つとして取り組まれてきたことから、創造的協議を大きな特徴としています。

創造的協議とは景観を単なる基準によるネガティブチェックでジャッジするのではなく、横浜やそのエリア、実際の敷地などの諸条件を鑑みながら、実際の事業とも方向性を擦り合わせ、アイデアを共につくっていく手法で、横浜らしさをつくる基本になっています。

cf.横浜市景観ビジョン（P72）  
「創造的協議により  
質を高める景観づくり」

#### コラム04 歴史を生かしたまちづくり

横浜は、安政6年（1859）の開港を機に発展した、歴史的にはまだまだ若い都市です。さらに、震災・戦災を経て、多くのものが失われました。それだけに、横浜のまちづくり・都市デザインは、「都市の記憶」としての歴史的建造物を、昭和63年（1988）に制定した「歴史を生かしたまちづくり要綱」など、様々な手法を駆使して残すことで、開港からの歴史をアイデンティティとして確立させてきました。これらの取組により、開港以降の近代建築や西洋館、土木遺産が残され、郊外部には農村の風情を伝える古民家や社寺が現在も息づいています。



## コラム05 水際線を楽しむプロムナード=開港の道

横浜では歩行者にやさしいまちづくりを進める中で、多くのプロムナードをその時その時の開発に合わせて整備してきました。平成9年（1997）には、桜木町方面とみなとみらい21新港地区を結ぶ臨港線跡地を「汽車道」として整備し、平成14年（2002）には、昭和61年（1986）まで貨物線として運行していた山下臨港線の高架橋跡を再活用し、赤レンガ倉庫から山下公園まで、港を眺めながら散策を楽しめる「山下臨港線プロムナード」をオープンしました。今後予定される東横線廃線跡地などもその一貫した取組の一つになります。

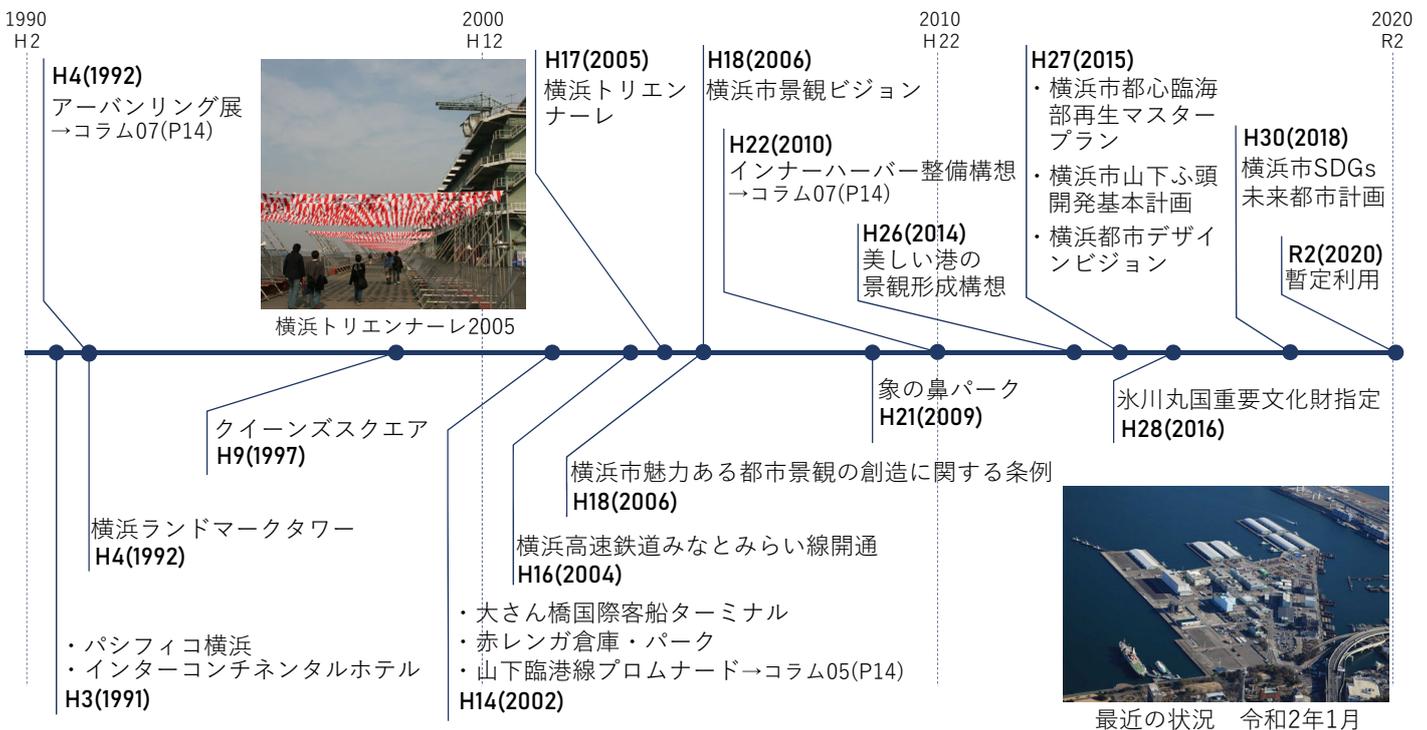
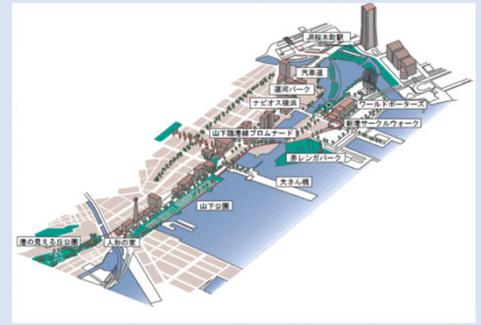
このように長い時間をかけて行われてきたプロムナードの整備は、汽車道、ワールドポーターズ、サークルウォーク、赤レンガ倉庫パーク、臨港線プロムナード、象の鼻パーク、世界の広場、ポーリン橋、人形の家、フランス橋、と、いくつものプロジェクトを紡ぎ、現在は桜木町駅から港の見える丘公園までの3.2kmをほとんど車と交錯することなく、各時代の歴史をなぞりながら都心臨海部を散策できる「開港の道」となっています。

開港の道の途中に位置する山下ふ頭の開発では、都心臨海部の回遊性向上のため、これらプロムナードとの有機的な結合が求められています。



(左) 汽車道

(下) 開港の道全体像



## コラム06 みなとみらい21地区の調和と対比

みなとみらい21中央地区の街は海に囲まれ、大さん橋や船上など、様々な場所から街全体の姿を見渡すことが可能なことから、建物一つ一つだけでなく、都市として一体的に美しく見えるように山側から海側へと緩やかに下がるスカイラインを設定しています。色も白色系に統一された高層ビル群であるスカイラインと、歴史ある赤レンガ倉庫に合わせて茶系で低層に抑えられた新港地区はコントラストを成し、お互いの魅力を高めるように計画されています。

また、埋立てによって新たにつくられたみなとみらいの海岸線は、横浜港の象徴である横浜ベイブリッジを焦点とする弧を描いています。6大事業はこのように細部のデザインも互いにリンクさせて計画されています。



## コラム07 アーバンリング展とインナーハーバー整備構想

6大事業の1つであるみなとみらい21地区やその隣のポートサイド地区の着工で将来像の一端が見え始めた平成4年（1992）に、内港（インナーハーバー）をぐるりと取り囲む2050年の円環状都市（アーバンリング）を都市の夢として描いた展覧会「アーバンリング展」を、横浜市などが主催して開催しました。横浜トリエンナーレ2005も山下ふ頭の将来の都市化を見据えて、戦略的に敷地に選定されています。

また、開港150年を迎えた平成21年（2009）には、このアーバンリング展を下敷きとして、開港200年の横浜を描く都市ビジョン「インナーハーバー整備構想」として、大学連携コンソーシアムから横浜市へ、提言されました。この提言の中では環境、交通、交流、産業、生活の5つの戦略が示され、海を中心にした文化都市と目標が設定されています。インナーハーバー構想中で、そのほかの未開発エリア=大黒ふ頭は新港湾産業エリア、瑞穂ふ頭が国際ナショナルパーク、京浜臨海部は産業再生エリア、山下ふ頭は産業イノベーション拠点として描かれています。



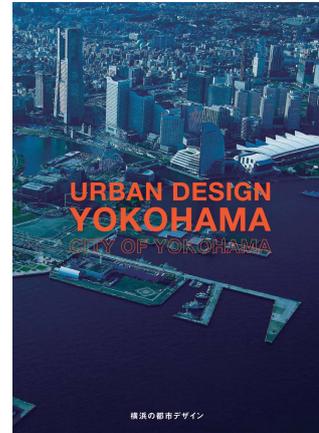
## 2 山下ふ頭の位置づけと背景となる取組

### (4) 横浜の都市デザインと景観形成

横浜市は日本の中でも先駆的に都市デザインに取り組んできました。横浜の都市デザインは【個性と魅力ある、人間のための都市をつくる】ことを目標として1960年代後半にはじまり、以来50年間、一貫性のあるまちづくりを進め、都市の魅力を生み出してきました。活動当初から掲げられてきた「7つの擁護すべき価値（7つの目標）」は歩行者にやさしいまちづくりに代表されるように、50年経った今も通用する、普遍的な価値として横浜市の都市デザイン活動の根幹を成しています。

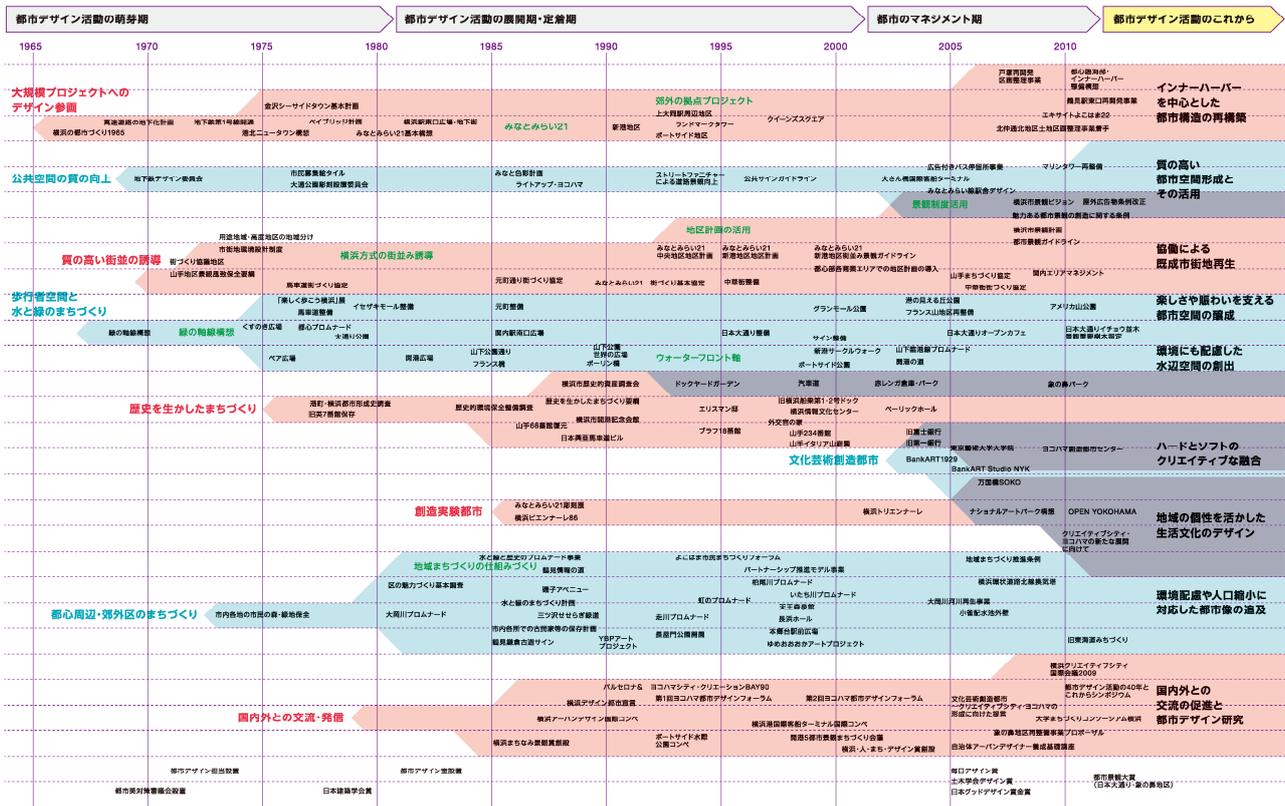
#### 7つの擁護すべき価値

- (1) 歩行者を擁護し、安全で快適な歩行者空間を確保する。
- (2) 人と人とのふれあえる場、コミュニケーションの場を増やす。
- (3) 地域の自然的特徴を大切に
- (4) 市街地内の緑やオープンスペースを豊かにする
- (5) 海、川、池など水辺空間を大切に
- (6) 地域の歴史的、文化的資産を豊かに
- (7) 街の形態的、視覚的美しさを創る



特に横浜の一番の個性である開港の地であるということが、街並みから感じ取ることのできるように、横浜の都市デザインでは歴史ある建物をきちんと残す「歴史を生かしたまちづくり」に力を入れてきました。それと同時に、その歴史的建造物に新たな機能や役割を与えることで、後世に建築を残しています。

そして、横浜は新しいものを受け入れる街でもあります。真っ白な横浜ベイブリッジやみなとみらい21地区、連続する丘のような大さん橋など、その進取の気質を表す新しいデザインもまた、横浜の魅力となっています。開港以来の歴史的な雰囲気と、それとコントラストをなす新しい街並みを組合せる手法、お互いの良さを際立たせ、街をめぐる人に横浜の多様性を感じさせます。また、横浜の景観形成は都市デザインの重要な手法のひとつです。景観法などの制度に先駆けて、デザインの調整や協議が行われてきた横浜には、景観形成の長年の蓄積があり、市民の誇りにもつながっています。



都市デザインの取組の展開

cf.横浜市都市整備局都市デザイン室 パンフレット「横浜の都市デザイン」

「個性ある都市 横浜の都市デザイン」(鹿島出版)

コンセプトを具現化  
するためのアイデア

3

### 3 コンセプトを具現化するためのアイデア

#### (1) アイデアの視点・要素

この章では、『横浜イノベーションIR』の実現に向けた景観形成上の4つのコンセプトについて、それぞれの視点、キーワードとなる要素をもとに、具現化するアイデアを示します。



横浜やインナーハーバーの地区特性や歴史、これまでのまちづくりの取組を十分踏まえつつ、

**山下ふ頭では、21世紀を象徴するような、新しい横浜の都市デザイン・景観づくりに挑戦します。**

#### 4つのコンセプト

1. 長く愛され、何度も訪れたい都市・横浜をつくる
2. インナーハーバーの一員として、横浜の都市づくりの新たな1ページをつくる
3. 山下ふ頭だからできる景観体験の創造
4. 世界に"横浜を魅せる"これからの都市デザイン

4つのコンセプトを具現化するための

## アイデア

「アイデア」は、4つのコンセプトを具現化するために考えるべきことを示したものです。

各アイデアを具体的にイメージするため、これまでの横浜での取組や、類似する先行事例を紹介していますが、『横浜イノベーションIR』には、これらの単なる模倣や組合せではなく、各アイデアの背景にある視点や要素を熟考し、考え方を昇華させ、これまでにないものを生み出すことで、新しい「横浜らしさ」を創出することが必要です。

### 視点

- ・ 都市的、ランドスケープ的な視点
- ・ 建築のあり方
- ・ アイレベル/パブリックスペース

### 要素

- ・ 環境/緑化/水辺
- ・ 横浜らしさ/山下らしさ/ふ頭らしさ/歴史
- ・ 交通/回遊性

## コンセプト1

# 長く愛され、 何度も訪れたいくなる 都市・横浜をつくる

山下ふ頭に多くの人を訪れ、何度も訪れたいくなる横浜を実現します。

山下ふ頭の建造物や空間、それらにより形成される景観は、  
いたずらに刺激的なものではなく、**機能性と普遍的な美しさを兼ね備え、  
長期的にその価値を持ち続けるもの**を目指します。

また、山下ふ頭の開発は短期間に一体的に行われますが、  
一過性のものでなく、**常に新たな価値を生み出す取組を継続し、  
長期的に価値を持続・向上しつづけるもの**としていきます。

- アイデア01 インナーハーバーの玄関口として、みなとみらい21中央地区等とあわせて世界を代表する景観を形成する
- アイデア02 山手の緑やインナーハーバーの海など、自然と人工物の連なりが織りなす美しい風景をつくる
- アイデア03 短期的に刺激的なものではなく、長期的に価値を持ち続けるよう、機能性、普遍性と結びついた意味のあるデザイン
- アイデア04 超高層となる場合は、建物ボリュームのリズム感や素材による魅せ方、デザインコード、群景としての一体感など、遠景・中景の見え方・あり方を考え、デザインする
- アイデア05 成長する緑や、季節感の演出、経年的に深まる材料など、長期的に熟成していくデザインとする
- アイデア06 質の高い空間として維持・管理するだけでなく、長期的な再投資により魅力を向上し続けることで、いつ訪れても新しく、常に多くの人を惹きつける都市・横浜をつくる

アイデア

# 01

インナーハーバーの玄関口として、  
みなとみらい21中央地区等とあわせて  
世界を代表する景観を形成する

山下ふ頭は、都市景観上、横浜のインナーハーバーを象徴する玄関口としての一面を持ちます。

関内地区やみなとみらい21新港地区、横浜駅周辺地区など、様々な特性の地区が近接しています。これらのエリアはもちろん、インナーハーバー構想で描かれている瑞穂ふ頭や大黒ふ頭など、これからのエリアも意識しながら、山下ふ頭の景観を形成していく必要があります。

山下ふ頭がみなとみらい21中央地区の建築群と同様の意匠・形態・リズムを持つ必要はありません。しかし、大きなボリュームとなる2つの地区は、今後のインナーハーバーの景観形成にとって、大変重要な意味を持ちます。



cf. **コラム08**「対比と調和を用いた事例」(P19)

アイデア

# 02

山手の緑やインナーハーバーの海など、  
自然と人工物の連なりが織りなす  
美しい風景をつくる

建築・橋などの人工物と自然地形が複合し、  
特徴ある景観を構成している事例



シドニー



サンフランシスコ



リオデジャネイロ

cf. **コラム09**「人工物の連なりが複合的に美しく、自然とあいまって特徴的な景観をつくる」(P20)

## コラム08 対比と調和を用いた事例

みなとみらい21中央地区の街は、超高層であること、海から街全体が見渡せるため、陸から海に下がるスカイラインを設定することで、建築の集積である街自体も“デザイン”されています。色も白色系に統一された高層ビル群である中央地区と、歴史ある赤レンガ倉庫に合わせて茶系で低層に抑えられた新港地区はコントラストを成し、例えば大さん橋のような視点場から見た時にも、お互いの魅力を高めあうように計画されています。歩いて回れる距離にある横浜都心部＝山手地区や元町、中華街、山下公園通りに関内、北仲通地区、みなとみらい21地区、横浜駅、ポートサイドといった街は、その規模によらず個性を持ちながらもお互いに横浜の歴史に紐づいてデザインされ、対比と調和が織りなし街の魅力を高めています。

山下ふ頭の開発を考えるときにも、既存のこれらの街と調和すること、一体的に意味のある景観をなすことが求められます。それは、単に山下ふ頭でみなとみらい21地区のスカイラインをそのまま踏襲するというのではなく、既存の街の特徴をあらひ、そこから要素を抽出して、意味のあるデザインとすることで物語性が生まれます。

さらに、横浜の都心臨海部を形成する街がそれぞれ個性的であるように、山下ふ頭でも新たな個性が発揮されることで、横浜に新たな価値がもたらされることも重要です。みなとみらいの中央地区と新港地区のように、対比的な手法でも既存の街へのリスペクトを表現することができます。これからの開発として、未来志向の街が、既存の街とも対比的なものであることで、お互いの魅力を高めることが重要です。

インナーハーバー内の後発の開発として、調和的にも、対比的にも意味を持たせるためには、アップデートされた都市の見せ方、スカイラインに劣らない相当のアイデアが求められます。



みなとみらい21中央地区



みなとみらい21新港地区



大さん橋から見たみなとみらい21地区

アイデア

# 03

短期的に刺激的なものではなく、  
長期的に価値を持ち続けるよう、  
機能性、普遍性と結びついた  
意味のあるデザイン

☞構造や環境配慮などの機能がデザインと一体となっている事例



BIG U

<https://img.big.dk/wp-content/uploads/2018/09/01-c3-battery-aerial-book-edit-dh.jpg>  
BIG-Bjarke Ingels Group

cf. **コラム10**「機能性、普遍性と結びついた意味のあるデザイン」(P20)

アイデア

# 04

超高層となる場合は、建物ボリュームの  
リズム感や素材による魅せ方、デザインコード、  
群景としての一体感など、遠景・中景  
の見え方・あり方を考え、デザインする



みなとみらい21地区

cf. **コラム03**「対比と調和を用いた事例」(P19)



北仲通北地区

cf.横浜市景観ビジョン実践ガイド (P8)  
「地域の「らしさ」を守り、いかし、つくる、景観づくり」

## コラム09 人工物の連なりが複合的に美しく、自然とあいまって特徴的な景観をつくる

建築、橋などの人工物と自然地形が複合し、特徴ある景観を構成している例：世界三大美港都市

オーストラリアのシドニー港、アメリカのサンフランシスコ港、ブラジルのリオデジャネイロ港等が世界三大美港と言われています。

シドニーのハーバーブリッジと世界遺産のオペラハウスなどの建造物による調和、更にロックス周辺の摩天楼群や水辺の親水空間が一体となって美しい景観を構成しています。

サンフランシスコもシンボルであるゴールデン・ゲート・ブリッジと丘陵地の山並み、歴史的な街並みと近代的な街並みの共存が、一目見てサンフランシスコだとわかる景観を形成しています。

リオデジャネイロは、岩山と美しい海によってつくられるダイナミックな自然景観と人の営みによってつくられた都市景観が、お互いを際立たせながらも、調和する事例で、世界文化遺産にも登録されています。

山下ふ頭につくられる景観も、横浜ベイブリッジなどと合わせて複合的に計画し、かつ、山手の丘や緑、インナーハーバーの海といった自然の要素も取り込んで、特徴ある魅力的な景観を生み出すよう、期待されています。

## コラム10 機能性、普遍性と結びついた意味のあるデザイン

機能とデザインが一体で解かれている事例

ニューヨークのBig U計画は、気候変動による水害対策の堤防を、起伏に富んだ遊歩道や緑地帯といった、多様な公共空間としてデザインすることで、防災機能と都市の魅力向上を同時に実現しており、グレーインフラからグリーンインフラへの転換事例として注目されています。

代々木体育館では、必要な機能＝無柱空間実現のために吊り構造を採用していますが、その構造上の力の流れを直接的に見せることが、美しい建築表現にもなっており、機能と形態が意味のあるデザインとして成立しています。

チパワー文化センターは、ニューカレドニアの伝統的な建築モチーフを引用すると同時に、サイクロンによる強風への対策や、ダブルスキンによる自然換気のシステムを構築したことが外観に特徴を与え、周辺の自然環境となじんだ建築となっています。

意味のあるデザインが普遍性を獲得するように、山下ふ頭の計画も長期的な価値を持つよう考え抜かれたデザインである必要があります。



代々木体育館



チパワー文化センター  
(ニューカレドニア)

アイデア

# 05

成長する緑や、季節感の演出、  
経年的に深まる材料など、  
長期的に熟成していくデザインとする

## ◀時を経て熟成していくデザインの事例

### 赤レンガ倉庫の煉瓦

赤レンガ倉庫はその歴史的な意味もさることながら、  
当時を代表する材料である煉瓦の経年変化、深みのある  
表情が、現代の都市景観の中で大きな個性と価値に  
なっています。



赤レンガ倉庫

### 山下公園通りのイチョウ並木

元々は関東大震災後に防火帯として、山下公園通りだけ  
でなく日本各地に植えられたイチョウ並木。現在では  
大きく育ち、紅葉の時期には、多くの人の目を楽し  
ませる魅力的な資源となっています。



イチョウ並木（山下公園通り）

## ◀時代の最先端が普遍的な価値を獲得した事例

### シーグラムビル

レンガやスクラッチタイルなど、横浜を代表する建材  
は、経年変化によってより深みを増すことで都市の魅  
力に寄与しています。一方、鉄とガラスといった経年  
変化のない材料でも、その当時の最先端であった建材  
の組合せが、デザインと相まって普遍性の獲得に至る  
こともあります。



CC BY 2.0 dandeluca

シーグラムビル

アイデア

# 06

質の高い空間として維持・管理するだけで  
なく、長期的な再投資により魅力を向上し  
続けることで、いつ訪れても新しく、常に  
多くの人を惹きつける都市・横浜をつくる

## ◀長期的に投資やてこ入れが行われ、その価値を持続する都市の事例

### その1 大丸有エリア

大丸有エリア（大手町、丸の内、有楽町）は、明治後期  
に日本初の近代的なオフィス街として開発され、その赤  
レンガの街並みは一丁倫敦と称されました。東京駅の建設に  
伴ってエリアを拡大し、初代の丸ビルに代表される高さ  
100尺（31m）に揃えられたスカイライン＝一丁紐育も誕生  
しました。高度経済成長期以降は街区の再編・大型化が  
進み、今も活発に再開発が行われていますが、超高層の低  
層部には31mのスカイラインが再現され、旧レンガ建物の  
復元や郵便局のファサード保存、皇居を意識した行幸通り  
の軸線など、積極的に自らの歴史や地区特性を保持し、表  
現することで地区の価値向上へとつなげています。

また、まちづくり協議会によるエリアマネジメントにも  
積極的に、その活動は商業プロモーションに留まらず、  
環境、防災、文化、公共空間活用と多岐に渡ります。その  
成果としての仲通りは、かつてのビジネスマンの街として  
もそのブランドを保ちつつ、高級ブランドの建ち並ぶ  
ショッピングの街、高質な公共空間に展開するイベントな  
どの舞台として、多くの来街者を迎える外向きの街へと進  
化しています。



### その2 ニューヨーク(タイムズスクエア、ハイライン)

ニューヨークの高層ビル、美術館といった建築や、セン  
トラルパークを中心とした公園からなるシティスケープは、  
各時代ごとに常にその時代を表すような技術や運営、デザ  
インが用いられ、ニューヨークの価値を持続、向上してき  
ましたが、それだけでなく、タイムズスクエアのように  
ニューヨークを代表する景観も、広告の逆規制や、昨今の  
全面歩行者空間化といった大胆な施策を打つことで、その  
時代ごとの価値を持続、向上しています。また、ハイライ  
ンのように当初の役目を終えた都市の構造物が、まったく  
違う公園という新しい役目を与えられることで、公園とし  
ても類を見ない、そこにしかない価値につながっています。



山下の開発においても、質が高く魅力的な空間を形成す  
るとともに、それを維持／向上する仕組みや運営の工夫、  
一貫性のあるコンセプトを持った再投資などにより、い  
つでも新しく、多くの人を惹きつける長期的な山下らし  
さの醸成が必要となります。

## コンセプト2

# インナーハーバーの一員として、 横浜の都市づくりの 新たな1ページをつくる

インナーハーバーでは、関内地区や山手地区、みなとみらい21地区など、各地区、各時代の景観的特徴を維持・創出してきました。これらの地区が、景観的な個性の発揮と調和のバランスをとりながらリング状につながっているのが、インナーハーバーの大きな特徴となっています。

山下ふ頭に生み出される景観は、**インナーハーバーに加わる新たな都市づくりの1ページとして、地域全体の景観と調和しつつ、山下ふ頭とこれまでの街並みの個性が対比しながらひきたてあう**ことで同時に、都心臨海部の魅力を形成します。

- アイデア07 インナーハーバー内での位置づけ・都市景観としての文脈を意識する
- アイデア08 群景としての在り方を創造する。特に視点場からの眺望やシークエンス、近隣エリアと併せたランドスケープに配慮した建築群をつくる
- アイデア09 区域内の非日常的なリゾート空間と、様々な機能を持つ既存の市街地が、魅力的に融合する結節点をつくる
- アイデア10 山下公園と連続した豊かな緑や歩行者空間、閑静な住宅地である山手地区との接し方に考慮する
- アイデア11 周辺エリアと連携する新たな交通として、スローモビリティや水上交通などを導入し、都心臨海部の回遊性の向上を図る
- アイデア12 高層になる建築は、板状／塔状など、その形状による特徴・影響をよく認識し、注意深く計画・配置する
- アイデア13 夜景演出は、周辺とのバランスを心がけ、既成市街地からの見え方に十分に配慮して、都心臨海部全体で世界に誇る横浜夜景を演出する

アイデア

07

インナーハーバー内での位置づけ・都市景観としての文脈を意識する

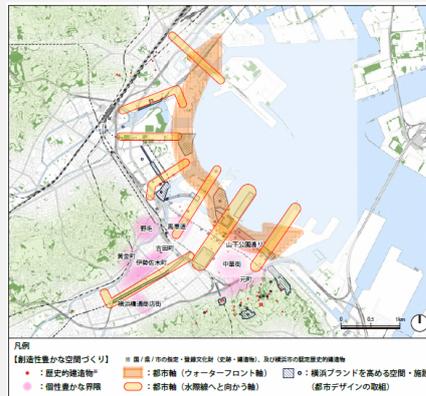
都心臨海部は、それぞれに個性を持った街が連なることで独特の価値を生み出しています。山手や元町、山下公園通り、中華街といった、それぞれ異なる居住地でのなりたちが、今も色濃く残る地区や、港の歴史を感じる関内、みなとみらい21新港地区、さらには新しく生まれた街であるみなとみらい21中央地区、横浜駅周辺地区、ポートサイド地区などが狭いエリアの内に共存しています。60年代以降のまちづくりでは、これらの街をつなぐ海と緑の都市軸が計画され、それぞれの街もその一端を担ってきました。この取組は今も綿々と受け継がれています。

山下ふ頭の計画でもこの都市形成の経緯や文脈に調和していくこと、その中で個性を発揮していくことが求められます。

インナーハーバーの特色ある周辺地域



水際線へと向かう軸線と、それらを横につなぐウォーターフロント軸を延伸する



都心部の再整備に合わせ整備した、桜木町駅から自動車道、山下公園等を経て港の見える丘公園に至るまでのプロムナード



cf. コラム05「水際線を楽しむプロムナード」(P14)

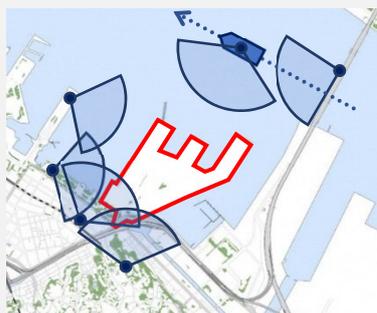
アイデア

08

群景としての在り方を創造する。特に視点場からの眺望やシークエンス、近隣エリアと併せたランドスケープに配慮した建築群をつくる

各視点場のアイレベルからの見え方にそれぞれ注意・配慮し、各視点場において横浜の既存の景観資源と自身の景観をどのように融合させるか、どのようなストーリーをもった見せ方とするか、入念な検討が必要です。

また、各種検討に視点場からのチェックは有効ですが、それにとどまらず、変化するシークエンスを意識し、見る角度によって多様に変化する景観を計画することが求められます。



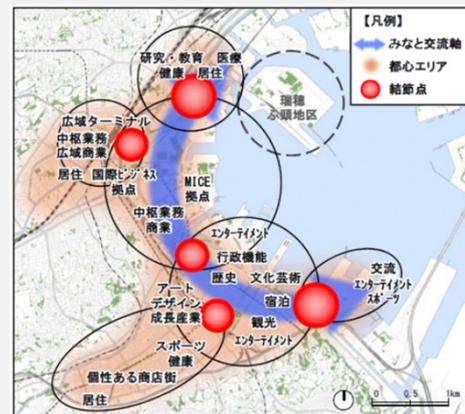
cf. 「横浜市山下ふ頭開発基本計画 5つの視点場」(P9)

アイデア

09

区域内の非日常的なリゾート空間と、様々な機能を持つ既存の市街地が、魅力的に融合する結節点をつくる

既存の市街地に隣接する山下ふ頭の開発では、地区の入り口、交通ターミナルや水上交通の駅といった場所には、隣接地区への配慮と合わせて、非日常的なリゾートのエントランスとしての魅力的な演出が必要です。また、観光送客施設として、ここから横浜や日本の各地に出掛けていく出発の場所であるということも重要な要素となります。



アイデア

# 10

山下公園と連続した豊かな緑や歩行者空間、閑静な住宅地である山手地区との接し方に考慮する

既存の市街地に一部が隣接する山下ふ頭の開発では、その周辺地区で行われてきたまちづくりの経緯や眺望、景観に対して十分に配慮した計画でなければなりません。具体的には山手の丘と連続するランドスケープのあり方、バッファーをとることによるボリューム感の軽減、日影や風の道など、周辺環境への影響を考慮した建築計画とする必要があります。



山手地区からの眺望



山下公園通り

cf. **コラム01**「山手地区のな  
りたちと取組」(P10)

cf. **コラム11**「山下公園と連続  
した豊かな緑や歩行者空間」  
(P24)

アイデア

# 11

周辺エリアと連携する新たな交通として、スローモビリティや水上交通などを導入し、都心臨海部の回遊性の向上を図る

周辺エリアをつなぐ新たな交通を考える必要があります。その際、回遊性はもとより、環境配慮や新たな視点場の創出、様々なスピードのモビリティで都市の体験を多様化することが求められています。



バンクーバーの水上交通



イケバス



連節バス

## コラム11 山下公園と連続した豊かな緑や歩行者空間

### 山下公園通りのまちづくり

山下公園通りは、かつて居留地エリアの海岸線につくられたため、当時は Bund=海岸通りと呼ばれ、現在のシルクセンターにあった英一番館をはじめ、ホテルや外国商館の建ち並ぶメインストリートでした。関東大震災により壊滅的なダメージを受けた後、震災のがれきを埋め立ててつくったのが山下公園であり、復興のシンボルとしてのホテルニューグランドや、イチョウ並木もこの時期につくられたものです。現在でも多くのホテルや、県民ホール、マリントワーといった市民に愛される施設が立ち並んでいます。

現在の山下公園通りは、港を望む山下公園、イチョウ並木、歴史的建造物といった景観資源を生かし、長く地元によるまちづくりが進められてきたエリアです。セットバックによる歩行者空間の拡幅や敷地内広場の設置、独自の建築ルールによる山下公園への日照の確保、駐車場出入口の位置の制限、海に向かう道路の通景空間づくりや、海から眺めた時に景観阻害となる広告を制限するなど、港の玄関口、横浜の顔としての自負を持ち、それにふさわしい街並みが形成されてきました。



アイデア

## 12

高層になる建築は、板状／塔状など、その形状による特徴・影響をよく認識し、注意深く計画・配置する

### 板状の建築物の特徴

- 大胆な動きのある形態や、角度によって違う景観が作りやすい
- 一定方向の視界を妨げることに注意が必要
- 足元空間の環境により配慮が必要

### 塔状の建築物の特徴

- 通景や風の通り道が作りやすい
- 日影や通風など、足元空間の環境をコントロールしやすい
- 他の低層建物との建築群としての統一感に配慮が必要

アイデア

## 13

夜景演出は、周辺とのバランスを心がけ、既成市街地からの見え方に十分に配慮して、都心臨海部全体で世界に誇る横浜夜景を演出する



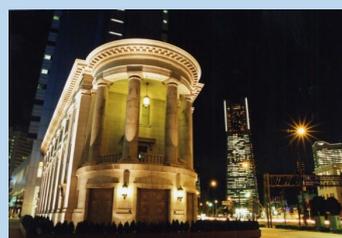
横浜の夜景空間

cf. **コラム12**「横浜の夜景演出のこれまでとこれから」(P25)

## コラム12 横浜の夜景演出のこれまでとこれから

横浜の夜景演出は歴史的建造物を顕在化するためのライトアップに端を発しているため、エリアによっては歴史的建造物以外の演出照明を抑えるライトダウンなど、街全体でのバランス調整も行ってきた一方、横浜ベイブリッジやみなとみらい21地区のスカイライン強調、象の鼻パークなど、都市のシンボルとなるような演出照明にも積極的に取り組んできました。昨今ではナイトタイムエコノミーの促進や他都市との競争といった観点から、リヨンのプランリュミエール、ビビッド・シドニーなどの事例も参照して、ライトアップやイルミネーションによって横浜のクリエイティビティを世界に発信して行く取組も始めています。

80年代に夜間景観の演出をいち早く取り入れた横浜ですが、技術革新の著しい分野でもあることから、ソフト・ハードを連携させて特別な時間を演出する「ヨルノヨ-YOKOHAMA CROSS NIGHT ILLUMINATION-」といった実践的なテストを行いながら、これまでの取組をベースにした落ち着いた雰囲気のみちづくりと調和しつつも、これからの横浜にふさわしい、新しい夜間景観を考える時期を迎えています。



歴史的建造物のライトアップ



横浜ベイブリッジとみなとみらい



ヨルノヨ  
-YOKOHAMA CROSS NIGHT ILLUMINATION-



ビビッド・シドニー

## コンセプト3

# 山下ふ頭だからできる 景観体験の創造

山下ふ頭は、一体開発により広大な土地を一貫性のあるデザインとできることに大きな特徴と可能性があります。エリアを回遊しながら体験する景観は、**多様な物語性**があるものでなくてはなりません。

また、横浜の景観を楽しむ**新たな視点場、多様な水域を活用したアクティビティ**など多彩な体験の場の創出が可能です。

ここに生まれる施設によって提供される横浜の新しい見え方、切り取り方は既存の横浜の景観的価値を更に向上するだけでなく、山下ふ頭自体に**これまででない体験**をもたらします。

- アイデア14 既存市街地を意識したオープンスペースや眺望スペース、新たな視点場などを複数設けるとともに、それらをプロムナードで有機的につなぎ、いつでもだれでも既存の横浜の景観を楽しむ機会を増加させる
- アイデア15 景観の見え方や切り取り方を工夫することにより、これまででない体験をもたらす視点場や憩いの場、滞在場所など多彩な空間を随所に設ける
- アイデア16 展望スペースや高層レストラン等、地上レベルとは異なる誰でも利用可能な空間を設けることで、様々なバリエーションの都心臨海部の見せ方を生む
- アイデア17 異なるタイプの水域の特徴を生かし、積極的な水辺のアクティビティや、きめ細かなマネジメントにより、親水性が高く、いつでも美しい、開かれた魅力空間を創出する
- アイデア18 建築物による長大感や圧迫感の軽減、プロムナードや広場などのオープンスペースが快適な空間となるよう、複層的にボリュームのあり方や魅せ方を考える
- アイデア19 周囲の緑地や緑の軸線と、山下ふ頭のオープンスペースやプロムナードの緑をつなげ、賑わいや、四季を感じられる空間を創出する
- アイデア20 多様なアクティビティの舞台となる、様々な大きさ・性格の広場・空間を設ける
- アイデア21 カジノは、主動線から隔離された適切な配置計画、デザインとするなど、必要以上に存在感を顕示しない工夫を行う
- アイデア22 リゾートとして周辺地区とは異なるコンセプトを導入することで、市民に開かれたオープンスペースや店舗、MICE施設、更には非日常的な空間・イベントが混在しながら一体的に楽しめる回遊性を生み出し、ここでしかできない体験・多様な体験を創造する
- アイデア23 単なる表層的な華美や豪華さを求めるのではなく、質が高く、きめ細かく、細部・質感にこだわりがあり、品のあるデザインを追求する
- アイデア24 港やふ頭の痕跡や要素を、新しいものに転用・活用等することで、都市の記憶を残す

アイデア

# 14

既存市街地を意識したオープンスペースや眺望スペース、新たな視点場などを複数設けるとともに、それらをプロムナードで有機的につなぎ、いつでもだれでも既存の横浜の景観を楽しむ機会を増加させる



横浜は誰もが景観を享受できる広場と、それらをつなぐプロムナードが豊かな街でもある

アイデア

# 15

景観の見え方や切り取り方を工夫することにより、これまでにない体験をもたらす視点場や憩いの場、滞在場所など多彩な空間を随所に設ける



ナビオス横浜から  
赤レンガ倉庫を見る



水辺のカフェ  
(スペイン・カダケス)



新たな視点場ともなった大さん橋

アイデア

# 16

展望スペースや高層レストラン等、地上レベルとは異なる誰でも利用可能な空間を設けることで、様々なバリエーションの都心臨海部の見せ方を生む



渋谷スクランブルスクエア



ドゥオモを直近で眺められるカフェ  
(イタリア・ミラノ)

アイデア

17

異なるタイプの水域の特徴を生かし、積極的な水辺のアクティビティや、きめ細かなマネジメントにより、親水性が高く、いつでも美しい、開かれた魅力空間を創出する

多様なアクティビティで横浜の水辺に新たな価値を創出する。また、適切な管理により、水辺を常に美しい状態に保つ。



SUPなどのアクティビティ



現代アート



水上オペラ

ふ頭が機能転換によって、多くの人が楽しむアクティビティの舞台となった事例



ネイビー・ピア (アメリカ・シカゴ)

アイデア

18

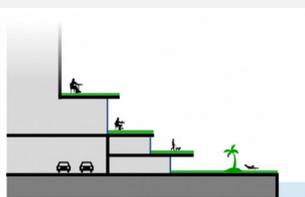
建築物による長大感や圧迫感の軽減、プロムナードや広場などのオープンスペースが快適な空間となるよう、複層的にボリュームのあり方や魅せ方を考える

高層部を視覚的に分節する庇等により、圧迫感を軽減した事例



COREDO室町

段階的に後退することで、圧迫感を軽減させる



外壁にリズム感を持たせ、植栽や様々な素材などで圧迫感を軽減した事例



ケ・ブランリー美術館 (フランス・パリ)



アイデア

19

周囲の緑地や緑の軸線と、山下ふ頭のオープンスペースやプロムナードの緑をつなげ、賑わいや、四季を感じられる空間を創出する



水際線沿いの都市軸と緑化は関連して計画されている



シアトルのウォーターフロント開発では港の機能転換と高速道路の地下化によって、多くの緑地や公共空間を生み出し、プロムナードや自転車の整備などで既成市街地と新しい開発の間を繋いでいる。

アイデア

## 20

多様なアクティビティの舞台となる、様々な大きさ・性格の広場・空間を設ける

例えば、国内外の観光客が楽しめるような、大型イベントを支える大きな広場だけでなく、市民が日常的に訪れて、ちょっとたたずむことのできる水辺の空間など、用意される空間とそこで体験できる時間には、深い関係があります。緑化やレベル差、周囲の賑わいや素材なども空間の違いを生み出す要素になります。緑や水辺、建物と一体的な広場や空間、場所をつくることで、地区内での体験の多様性、訪れる人の幅広さやコミュニティを育む土壌を確保します。

また、山下ふ頭の開発では、道路、建築、緑地、港湾といった、見えない制度上の境界を越えて一体的に検討することができます、という利点があります。「緑地と建築」、「道路と建築」、「道路と親水空間」といった境界に捉われないあり方が、新しい広場・空間の魅力形成につながります。



グランモール公園



オスロ オペラハウス



ポンピドゥーセンター

アイデア

## 21

カジノは、主動線から隔離された適切な配置計画、デザインとするなど、必要以上に存在感を顕示しない工夫を行う

アイデア

## 22

リゾートとして周辺地区とは異なるコンセプトを導入することで、市民に開かれたオープンスペースや店舗、MICE施設、更には非日常的な空間・イベントが混在しながら一体的に楽しめる回遊性を生み出し、ここでしかできない体験・多様な体験を創造する

アイデア

## 23

単なる表層的な華美や豪華さを求めるのではなく、質が高く、きめ細かく、細部・質感にこだわりがあり、品のあるデザインを追求する

アイデア

## 24

港やふ頭の痕跡や要素を、新しいものに転用・活用等することで、都市の記憶を残す

cf. **コラム13**「都市の記憶を残す」(P30)

## コラム13 都市の記憶を残す

### 元町・中華街駅のデザイン

「横浜の歴史と文化を編纂した本の駅」というコンセプトで、ホームの壁面や天井には街並み、コンコースには等身大の人物や道具等がプリントされています。



### 氷川丸と白灯台

「氷川丸」は、昭和5年（1930）に完成し、北太平洋航路で長らく運航されました。太平洋戦争では病院船として運用され、戦後は昭和35年（1960）まで運航を続け、運航終了後は山下公園前に係留されました。戦前より唯一現存する日本の貨客船であり、船内のインテリアなども含めて貴重な産業遺産であるため、平成15年（2003）に市の有形文化財の指定、平成19年（2007）には経済産業省の近代化産業遺産として認定、さらに平成28年（2016）には国の重要文化財（歴史資料）に指定されました。

「白灯台」は、山下ふ頭ができる以前の明治29年（1896）、東水堤の先端に設置されました。灯台としての役目を終えた昭和38年（1963）に、現在の場所に移設しました。なお、白灯台と同時に建造された北水堤の「赤灯台」は今も現役です。



### 赤レンガ倉庫の改修の際、壁に使われていた材料を活用したサイン

赤レンガ倉庫の改修の際、壁に使われていた材料を、開港の道の案内サインとして活用した事例。レンガの目地を美しく見せるために、壁を斜めに抜きとるなどの工夫を行っています。



### 新旧大さん橋／鉄さん橋時代

大さん橋は鉄棧橋と呼ばれた頃から、何度も改修や拡張を重ね、現在の大さん橋で7代目となります。関東大震災による焼失や、船舶の大型化など、時代の変遷による様々な理由で姿を変えてきましたが、大さん橋の場合は、港の重要な機能には変わりありませんでした。現在の大さん橋は平成7年（1995）の国際デザインコンペによって選ばれましたが、設計のツールがCADになる変遷の時に、床／壁／天井や内や外、各レベルがシームレスにつながった、まさにこれからの建築として生まれ変わりました。



横浜港公共ふ頭案内（横浜市中央図書館）



市の施設あんない（横浜市中央図書館）

1970年代の大さん橋の様子



現在の大さん橋の様子



## コンセプト4

# 世界に“横浜を魅せる” これからの都市デザイン

都市・建築のデザインは、機能や人々の活動と切り離して考えることはできません。

横浜市では、SDGs未来都市、観光・MICE都市、文化芸術創造都市、イノベーション都市・横浜、ガーデンシティ横浜といった、未来のための政策やプロジェクトを進め、また、様々な主体により様々な活動を行っています。山下ふ頭では**これからの横浜を代表する景観として、これらの施策・活動と方向性を共にして、それを象徴的に体現するもの**であることが求められます。

象徴的な“魅せる”環境配慮や、横浜に集積する創造性の発露など、横浜のショーケースとしての独自性ある景観づくりや市民生活を豊かにするための、これまでに無い新たなウォーターフロントでの体験を創造すること等が**更に進化した「横浜らしさ」**につながります。

- アイデア25 SDGs未来都市、観光・MICE都市、文化芸術創造都市、イノベーション都市・横浜、ガーデンシティ横浜といった、横浜の政策を表現する新しい建築デザインによって、横浜の未来をシンボリックに可視化する
- アイデア26 建築と一体となった緑化や、環境配慮に特化した超高層、デジタルシティやZEB、エネルギーポジティブな開発など、これからの建築にふさわしい新しい技術に挑戦する
- アイデア27 人を中心としつつ、多様なモビリティと共存できる快適な移動空間が構築された、新しい都市に挑戦する
- アイデア28 港の機能転換として、世界に誇ることのできる事例となることを目指す
- アイデア29 DMO等との連携により、観光・送客機能を拡充し、都心臨海部を活性化する
- アイデア30 時代のニーズを先行した、これまでにない新しい活動で、水辺空間など多彩な公共的空間を魅せる

アイデア

# 25

SDGs 未来都市、観光・MICE 都市、文化芸術創造都市、イノベーション都市・横浜、ガーデンシティ横浜といった、横浜の政策を表現する新しい建築デザインによって、横浜の未来をシンボリックに可視化する



SDGs 未来都市

象の鼻パーク



YOXO BOX  
(イノベーション都市・横浜)

アイデア

# 26

建築と一体となった緑化や、環境配慮に特化した超高層、デジタルシティやZEB、エネルギーポジティブな開発など、これからの建築にふさわしい新しい技術に挑戦する



Woven City (ウーブン・シティ)



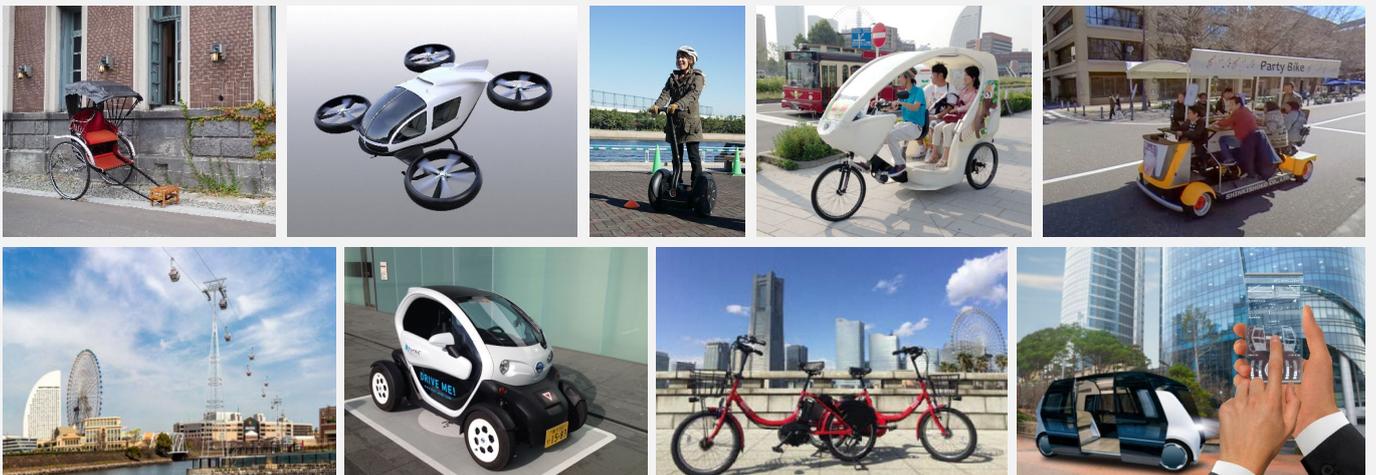
フランス国立図書館

アイデア

# 27

人を中心としつつ、多様なモビリティと共存できる快適な移動空間が構築された、新しい都市に挑戦する

横浜は、人が街の主演であるという信念から、長い時間をかけて歩行者にやさしいまちづくりを行ってきました。この考えは普遍的である一方で、現代のテクノロジーの進化によって、人と車の二項対立の時代から、様々な移動手段、モビリティが、同一空間の中で成立するような世界がすぐそこまで来ています。山下ふ頭でもICTに支えられた新しい移動空間の検討や、その臨海部全体への波及など、人とモビリティの可能性を広げるような挑戦が求められます。



アイデア

# 28

港の機能転換として、世界に誇ることのできる事例となることを目指す

港の機能転換、ブラウンフィールドの転用によって魅力的なウォーターフロント開発を行った事例は多くあります。横浜のみならず、21地区も、以前は造船場、貨物線、操車場、ふ頭からなる港の再開発により生まれた街です。

また、アメリカのシアトルやNY、ハンブルグのハーフェンシティ、ロンドンのドックランズといった魅力的なウォーターフロント開発では、経済だけでなく、その国の文化やライフスタイルに革新をもたらす開発として、世界に向けて発信されています。

山下ふ頭でも、突堤の活用など、港であったことの痕跡は残しつつ、親水空間や様々な新しい機能の導入、最先端の環境配慮などによって、21世紀の世界に誇ることのできる事例となることを目指します。

### シアトルの事例



### ハーフェンシティの事例



アイデア

# 29

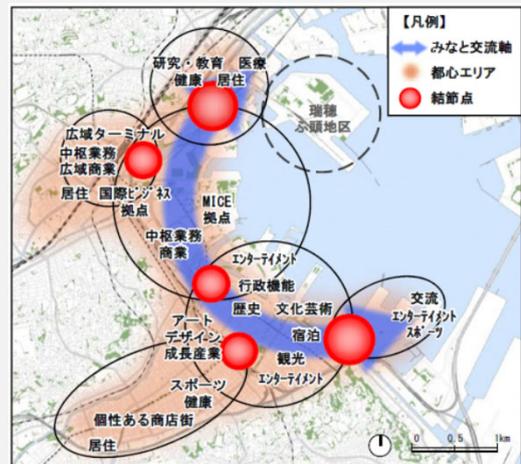
DMO等との連携により、観光・送客機能を拡充し、都心臨海部を活性化させる

近年、ホテルのサービスの一環として、宿泊者に周辺の観光案内だけでなく、グルメやお酒・カルチャーなどをテーマにした、より街を楽しめるサービスなど、新しい魅力体験のツールも生まれています。さらに、DMO※等との連携を図ることで、観光情報の収集や発信、各地へのツアーの企画を行う仕組み・体制を構築する可能性も十分に考えられます。

また、地域が密接に連携、エリアマネジメントに取り組むことで、オープンスペースの活用や地域をあげてのイベントの導入、例えば大阪の「水都大阪」のような水辺の活性化や、「ビビッド・シドニー」のような大規模な夜景演出など、エリアの魅力増進を進める事例が、昨今多く生まれています。

『横浜IR』と山下ふ頭周辺の都心臨海部の各機能が有機的に融合し、それぞれの役割をしっかりと果たし相乗効果を最大限発揮していくことで、世界が注目し、横浜が目的地となる都市へとイノベーションします。

※ Destination Management/Marketing Organizationの略。地域の多様な関係者を巻き込みつつ、データ等に基づく科学的アプローチを取り入れた観光地域づくりを行う舵取り役となる法人です。



アイデア

# 30

時代のニーズを先行した、これまでにない新しい活動で、水辺空間など多彩な公共的空間を魅せる



ニューヨークタイムズスクエア



水都大阪 (出典:水都大阪コンソーシアム)



OPEN  
YOKOHAMA